The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対談：自己病名は吉野大輔
Author(s)	吉野, 大輔; 内村, 公義
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 84-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90078
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集３　第８回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
テーマ「狭間からの呼び声：まちなか相談室「風の舎」に集う人々」

対談：自己病名は吉野大輔

吉野　大輔 × 内村　公義

内村：いつもとちょっと違う空気感ですが、楽しくやりましょう。早速ですね、表題である「自己病名は吉野大輔」というところから入ろうと思います。通常ならば吉野さんを紹介するときには、吉野さんには精神障害があって、精神障害者・家族懇談会「風まかせ」の代表をしていますっていうふうに紹介して、実は吉野さんは鬱でしてねって話になるんですけど、今回は「私の病名は吉野大輔です」ということなので、それについての確認から始めたいと思います。「自己病名」という言葉は、北海道の「べてるの家」のキーワードの一つみたいなものですが、医者につけてもらう病名じゃなくて、自分で病名を付けていく、そういうふうにして自分の苦労を自分で名づけていくということで、自分の苦労を自分でちゃんと理解していく。「自己病名は吉野大輔」という表題には、そういう意味が含まれているんですが、吉野さん、そう理解していいですか。

吉野：めちゃめちゃ端折りますけど、話せば長くなっちゃうので。自分が自分であるがゆえの苦しみというものがあるということです。精神障害というと、最近、脳科学的にもメカニズムがわかってきて、脳の誤作動というか、脳の障害による症状もあるわけですけど、これについては医療に丸投げすればいいんですよね。薬を処方してもらえば。問題は精神的苦痛というか、苦悩というか、こっちの方がどっちかというと厄介。人を自殺に追い込むのは、ほとんどこの苦悩の方です。この苦悩が行き詰まったすえに、死という選択肢しか無くなる、止めようがない。結果として、苦悩に関しては医療では対処しようがない。うつ病と診断される他の精神障害者の苦悩の話を聞くと、僕とはやっぱり違うんですね。だから僕は「うつ病の吉野大輔です」と言いたくない。この苦悩は、みんなと違って私が私であるがゆえの苦悩である、つまり苦悩が私である、苦痛そのものが私である、ということで、吉野大輔という自己病名をつけました。

内村：私は悩んでいる、悩む私。それが私だ。そうすると悩みにもし名前をつけるとすれば、「吉野大輔」ということになるわけですね。症状としての苦痛、これはお医者さんに丸投げしてなんとかなるやろうけども、だけども悩みはもうどうにもならん。その悩みの中身は何なんやろう？

吉野：えっとこれは、あの、大学時代に人間不信になって、さらに苦悩した結果、自己不信になった。

内村：悩みの根本は人間不信と、自己不信である。で、その人間不信と自己不信ということから、死にたいという言葉も出てくるんやろうけど、そこに行く前に、なんというかな、私が悩むというのは、それはやっぱり私を信じられないという悩みやな。

吉野：はい。

内村：私を信じられないというのが一番の悩みなわけだ。

吉野：そうです。

内村：そうすると、信じられないまま、信じられない自分を生きるのはなかなか難しいもので、そのまま生きるということよりも、やっぱり死というものに傾いてしまうというわけだ。

吉野：はい。そうですね。

内村：以前、死にたいという言葉についてあなたがポロって漏らしたことがあったんだけども、人間不信があって、孤立した、しかも自分自身は信じられない。そこで体が痛いときに思わず「痛い」と叫ぶみたいに、「死にたい」って叫びたくなってしまうんだって。その死にたいっていうのは文字どおりの願望なのか？

吉野：本当に死にたいという額面通り、言葉通りの意味ではないですね。僕だけじゃないと思うけど、抑うつ傾向のある人はそうだと思うけれども、結果として死によってしか取りようがない苦しみ。薬だったらどうなるか、精神病棟に入院して、ひどい人になるとずっと寝かされてる。かなり昔ですから、僕が入院していたのは。古い体質の精神病棟で、要するに眠らされるんですよ。死なないように。個室じゃなくて保護室で簀巻きにされて、口に物詰められて、縛られて、薬をガンガン飲まされて寝かされて、廃人のようにダラーっと涎垂らして寝てるのを見たことありますけど、それしかない。でも、みなさんそれを経験してるんですよ。惨めで、ますます死にたくなる。死ねんのよ、薬だと。そうなりたくない。他に手段がない、だから死にたい。結果として死にたいとなるんですよ。消去法でもう死しかない。

内村：そうすると、選択肢として、死ということしか残らんということね。

吉野：21 歳の頃に発症して、かれこれ 30 年経ちますけど、いまだにその繰り返し。もとは

と言えば、大学で二人の先輩に裏切られたようなことがあって、それが始まりで。で、当初は相手を責めてたっていうか、なんでだ、なんでだ、なぜ人はこう残酷なことをするんやって、思ってたんだけども、そこで行き詰まって。死のうとしたんだけど、なぜ死ぬかについてどうしても遺書を残さないかんという思いが僕の中ではあったんですね。で、遺書を書こうとしたんだけど、文章が書けない。僕は国語が全然ダメだったんで。でも、その中で高校時代に課題として、夏目漱石の『こころ』を一冊読めと、将来役に立つからと言われて。それを大学時代になんか知らないけど持ってきたんですね。住んでたアパートに。それを参考にして遺書を書いていこうとしたら、文学というよりもその根底には哲学性があって、それによって模索が始まったんです。相手を問い詰めていたのが、今度は自分自身にそういうのがないか問い始めたんです。そうすると、もっと追い詰められる。下手すると人を殺めかねないというような残虐性を自分自身に発見して、自己不信に陥ったんです。でも、さらに〔『こころ』を〕読み続けたんですね。そうするとますます哲学的なものが深まっていくんですよ。その結果いつまで経っても遺書は完成せずで。結局いまだ完成せずです。そこで感じたのは哲学の必要性ですね。苦悩をちょっと和らげるというか、上手に苦悩するというか、上手に悩むというか。それが哲学かなと、僕は位置付けています。

内村 : なるほど。臨床哲学フォーラムだから哲学の話をしてるわけじゃないけど、そういう経験があって哲学の話になるわけだよな。僕もあなたから漱石に『文芸の哲学的基礎』という本があると聞いて、チラチラと読んだこともあるけども。あなたのいう哲学とは何なのか、あなたにとっての哲学とは一体なんなのか。

吉野 : 絵画を言葉で表現するのは不可能じゃないですか。それと同じで脳の症状も言葉で言い表せないキツさがあるんですよ。でも、これは薬でなんとかなります。医療というか、医学でなんとかなるようになっている。一方で、苦悩ということに関しては、医療じゃどうにもならん。止めることしかできない。でも僕は苦悩を深く掘り下げることに意味があるような気がして。少なくとも僕は遺書を完成させないかん。そのためには、その苦悩を明確にしなきゃいかん。そのようにして掘り下げていくことで、逆に苦悩を和らげるというか。苦しいから、生きづらいから死ぬんであって、だったらその辛さをずっと掘り下げ続ければ生き辛さを生き続けることになる。そういうことに役立つのが哲学。言ってみれば苦悩に効くのが哲学という薬、そういう感じです。

内村 : 人生の苦悩には哲学で対処する。そうか。でも、哲学っていうのは苦悩を和らげてくれるわけ？　なんかそれは違う気がするけど。

吉野 : なんていうか、不安と心配の違い。不安というのは漠然としてよくわからない不安なんですよね。でも不安の内容が具体的になっていくと、不安って心配になっていくじゃない

ですか。哲学を補助に使うと、不安の中身がより具体的になってくるんですよね、漠然とした苦しみが。結構、べてるの家とかで言われている「話すことは体から離すこと」っていうことと近いと思います。自分から苦悩が離れると、それを眺められるようになる。そういう効果があると、僕自身は思っていますね。

内村：そうすると、なんというか、悩んでいる自分をもうちょっときちんと見つめられるということか。

吉野：そうですね。客観ともまた違うんだけども。

内村：ちょっと違うわけかね。例えばよ、さっきもチラッと言っていたけども、薬を飲むことによって眠らされれば、悩まなくなるわけだろ。哲学をすることで悩みはどうなるの？

吉野：あの、どんどんどんどん前に進みます。というか深くなります。ずーっと自分の中へ中へ深く内側へ掘り進んでいく感じ。僕、理系じゃないですか。理系の中でも好みで言えば、宇宙物理学なんですよね。で、宇宙物理学って外へのベクトルですよね。遠い世界を知るためには便利な学問で、哲学は内側を掘るのに都合のいいものかなって。

内村：ちょっと難しい話になりすぎたね。この話は、例えば「風の舎」っていうのはあなたにとって何であったかっていう話と重なりそうな気がするんだけども。「風の舎」との出会いというか、僕との出会いとか、ちょっとその辺の話をしてくれませんか。

吉野：えーとですね、内村さんは人づてに僕の話を知ったらしくて、なんかきっかけがいるということで、チラシ制作を頼みにいらっしゃったんですね。で、内村さんは突然現れたんだけども、引きこもって苦しんでいる僕にとっては、見ていきなり、この人は、「わからん」とか「そんなこと考えたらダメ」とか「死んだらいかん」とかそういうことを言わなそうだなって、なんとなく雰囲気で思って。自分の普段、家族に理解してもらえない、誰にも理解してもらえない考え方と苦しみを、自然と話したのがきっかけですね。で、風の舎にじわじわと行くようになった。「風の舎」に行くのは、最初は勇気が必要だったんですけど、僕は「風の舎」に、家を出て引きこもりに行っていたんですね。家を出て、引きこもる場所として使ってたんです。なんで「風の舎」で引きこもることができたかっていうと、内村さんをはじめ、みなさん僕の苦悩の中身をおもしろがって聞くんですね。よく質問してくれる。「それで？それで？」って。「吉野さんのセミナー始まったよ」とかなんとか言って、茶化して、僕がずーっとしゃべるんですね。苦悩するのを応援されてるような、そういう感じを受けて。結果として苦悩することを肯定されるということですかね。

内村：悩みが和らぐということは、自分が悩むことが肯定されるということ、そういうことがあったというわけやね。悩みを否定されないわけだから、そうするとなんというかな、悩み続けるということになるのかな。対談の前に二人で話したときに吉野さんが「これ今まで言わんかったことやけども」って言ってさ、吉野さんは哲学によって悩みを回復したって言ったよね。その悩みを回復するっていうのはおもしろい表現やなと思った。その辺のことを聞きたいな。

吉野：ある時期ですね、もう 20 年か 15 年かわかんないけどだいぶ昔ですよ。「風の舎」に行く前にですね、薬をずーっとどんどんどんどん処方してもらって、最新の薬やらなんやら増えていって。そしたら、効果てきめんになったんですよ、ある時期。薬の加減が自分の症状とマッチして。そしたら、それこそ悩みのない苦悩のない生活ができるようになった。最初はよかったんですよ。すごい心地よかった。「あ、病気にならなかったらこんな楽な生き方ができるんや。これを求めたんや」って思ってたんだけども。薬を、錠剤をですね、1 日分朝・昼・晩って分けますでしょ、一週間分。一人で分けてるときにハッとしたんだけでも、一食当たり 13 種類飲んでるんですよ。僕、自分でも引きました、そのとき。「あれ？　俺って一体何者なん。俺、薬で作られた人間なの？　俺の人生って薬でできとんのかな？　この考え方も、価値観も、この見方も。じゃあ、俺、どこにおるの？　わからん」って。そうやって、よくよく考えてみたんですよ。過去を振り返って。そうやって自分らしさとは何かを考え出すと、どうも、病気になって自己を常に問い、苦悩していく私が自分らしいって気づいた。そこから苦悩を取り戻したい、自分らしさそのものを取り戻したいと思うようになりました。主治医と相談して、一旦徐々に減薬していって、それどころかゼロにまでして。今は必要最低限にしている。

内村：その自分自身を取り戻すということと関連するんだけど、あなたが福祉サービスを受けて感じたことを手短に話してくれませんか。

吉野：相手を敵に回しちゃうような言い方かもしれないけど、精神障害者の僕にとっての「障害」は、福祉なんですよ。福祉が「障害」。福祉的サービスを受けるっていうのは、つまり、僕の精神を復権するためのサービスを受けれるもんやって思っとったんですけど、実際行ってみたら、彼らの提示する福祉サービスが僕のニーズに合わんわけですよ。おかしいなって思って、このことを職員さんに伝えたら、どうしたらいいか分からないんですって答えが返ってきた。分からないなら僕らに聞いてよ。精神障害者にどうしたらいいか相談してください。

内村：「私たちに相談してください」ってものすごく大事なことやね。その相談に応じて当事者は当事者として「私はこうしたい」ってはっきり言葉にせなあかん。

吉野：社会がそのままだったら、結局、僕たちは戻る場所を失うんですよ。今のシステム上、戻る場所っていったら病院の中かな。精神障害者への偏見もあるし、社会的なシステムの問題もあるし。社会を意識改革しなきゃいけないし、ソフト面を変えなきゃいけない。そのためには、僕たちが問題提起をしなきゃいけない。

内村：自分の経験を語る、自分の人生を語る。そのことについて、あなたの原点やなって思っていることがあるんやけども。町内の懇親会でカラオケの機械が故障したことがあったじゃないですか。

吉野：はい、家の中でも引きこもってた時期がありまして。そんなときに、町内で企画した日帰り旅行があったんですね。そのとき参加者が多くて、70 人くらいだったんですよ。僕は、カメラが使えるので、写真係というか、撮影係として呼ばれたんですよ。昼に食事を食べた後に、余興でカラオケ大会があったんだけども、僕の番になったときに機材トラブルが起きて、カラオケの機械が止まっちゃたんですよ。でも、マイクは機能しとったんですね。ホテルの人がトラブルをなんとか解消しようとがんばってるんだけども、間が持たないわけですよね。間が持たんから、僕は自己紹介というか、町内で生まれ育ったことについて、みなさんに感謝の言葉を言い始めたんです。そしたら、話の流れ上、必然的に自分の病名だったり、具体的なことだったりを話し始めて、結果的に精神障害をカミングアウトすることになったんですね。その後、歌ったんだけども、僕が結局、トリになりました。その後、参加してるおばちゃんたちがバーって集まってきて「感動した」「感動した」って言うんですよ。歌の方かと思ったらスピーチの方やった。要するに、「そげん苦労しとったとね」って、「辛かったとね」って声かけてくれて、一気にバリアがバーンってなくなったんですね。それまで近所をうろついていたとき、みなさんと顔は合うんだけど声をかけてはこんわけですよ。でも、その日から、声がかかるようになった。なんでか？向こうからすれば、声かけていいかどうか分からないんですよ。お節介と思われるかもしれないから。でも、それからは「大ちゃん、大ちゃん、最近調子どがんね」って声かけられるようになった。つまり、僕の気持ちを伝えたことは、相手にとってよかったんです。僕にとっても結果よかった。

内村：そこから始まったのね。「風まかせ」をやっているのもそうなんですけど、やっぱり社会を変えねばならんという思いがあって、そのためには精神障害者がその主体として日々の暮らしの中で果たすべき課題も多くある。今みたいな話をもうちょっとのんびり聞ける場が必要と思うので、これからもゆったり、ゆっくりとやっていきましょう。時間が来たので、ここまでにします。どうもありがとうございました。

（文字起こし・文責：二宮晃紀）